

岩増氏、町田氏を偲んで

まもなく 90 歳になる筆者の年代になると親しかった友人の訃報に接する機会が多くなる。そうした中でも、去る 2 月 3 日のように、同時に二人も亡くなると寂しさも一入である。しかもそのお二人が共に同年代で、どちらも最近までお元気でいられたのを承知していたので、その思いは一層深い。

その一人は岩増弘三さんである。特定非営利活動法人 BHN テレコム支援協議会（以下、BHN と略称する）で 20 年以上もご一緒させて頂いた。BHN は 1992 年に設立されたボランティア団体であり、昭和 29 年電電入社で無線屋の栗木富男さんが創立に深く関わっている。32 年入社の室谷正芳さんもこれに協力され、山根信義元無線支部長も活躍されていた。岩増さんは昭和 30 年に京都大学の修士を卒業され、同年、電電公社に入社された。この頃は国家公務員試験と同様に、電電公社の入社資格には学士と修士の区別がなかった。同期生の間では、年齢に差があるため若干の敬意を抱いて接していたが、他の年次からは入社年だけで、修士であることに特段の区別なく扱われていたように思う。

岩増さんは、電電公社の専門でいうと交換屋である。昭和 31 年入社の無線屋である筆者とは接触の機会が全くなかった。その二人が急速に親しく付き合うようになったのは、昭和 49 年の中近東への出張からである。

昭和 48 年に第四次中東戦争が勃発、ペルシャ湾岸の産油 6 カ国がイスラエル支援国に対する石油の輸出禁止方針を決めた。第一次オイルショックである。石油資源を持たず、すべて輸入に頼らざるを得ない日本は、支援国リストから外してもらうことを国の最重要課題とした。施策の一環として、産油国に電気通信に関する技術援助を行うよう、郵政省を通じて電電公社に命令が下された。

昭和 49 年の ITU 無線主管庁会議では IFRB（国際無線周波数登録委員会）委員の選挙も行われたため、電電公社や KDD の幹部も動員され、会議に出席していた。電電公社からは緒方研二総務理事が出席していたが、上記任務を遂行するため会議の途中から急遽アラブ諸国を廻ることになった。言うなれば援助の押し売り訪問である。施設局無線課長の筆者は、職務上当然ながら会議に出席していたが、緒方さんへの随行が優先された。

ジュネーブから、まずアラブ宗主国エジプトのカイロに飛んだ。ここでクウェート事務所長の新井俊一さんとロンドン事務所長の岩増さんが合流した。新井さんには海外技術連絡室で面識があったが、岩増さんとは初めての出会いであった。

最初のエジプト通信主官庁の訪問は友好理に行われた。次が、アラブ諸国の中でイスラムの戒律がもっとも厳しいとされるサウジアラビアだった。首都リヤドに直行するフライトがなく、イスラムの聖地メッカの西方、紅海沿岸の港町ジッダから入った。

フライトの客席乗務員はすべて軍服姿の兵隊で、ろくな飲み物も出てこない。サウジアラビアへのアルコールの持ち込みは厳禁で、携行しているのが見つかりと鞭打ちの刑だと脅かされ、隠し持っていたウイスキーのポケット瓶を座席の背もたれにこそこそと押し込んだ。ジッダからリヤドの日本大使館へは電話も通じない。東京・大阪間より距離のあるリヤドへ

は列車もフライトもなく、巡礼道を車で一日がかりで行く。途中、食堂もなかったが、飲食をどうしたのか今では思い出せない。

リヤドでは訪問先ごとに、銃を持った兵隊の検閲を受ける。予約していた通信局長を訪問、技術援助を説明していると、相手の局長は途中で「礼拝の時刻だ」と言い、絨毯に膝まずいてお祈りを始めてしまう。ろくな返事を聞かされないまま辞去せざるを得なかった。

リヤドからはクウェートに飛んだのだが、帰路のリヤド空港でも一騒動あった。その詳細を述べるのは本稿の趣旨ではないので省略するが、街中に公開の投石死刑場もあるリヤドに滞在し、緊張しっぱなしの三日間であり、それが岩噌さんと筆者の間に戦友とも云える親しさが生まれた元であることをご理解頂きたい。

岩噌さんは1998年にBHNに入会され、直ちに理事に就任された。2017年からは顧問になられたが、引き続きBHNの活動に大きな貢献をされた。その背景には、電気通信研究所勤務で培われた交換技術に関する深い知識と、ロンドン事務所長や海外連絡室次長時代に職務を通して得られた国際感覚、さらにはNTT退職後のマレーシア国電気通信省顧問や新日本ITU協会専務理事時代の国際協力のご経験がある。

BHNでは、主として東南アジア諸国の人材育成を目的とする研修の場において、上述のような卓越した能力が遺憾なく発揮された。なまりの強い研修生の英語でも問題なく理解され、質問に対する講師の解答が不十分だと思われると、相手の国情を熟知した上での的確な補足をされておられた。

常に完全を求めると性格のため、年齢差のあるBHNのスタッフにはその鋭い舌鋒にたじろぐ場面もあったが、前述のような戦友仲間の筆者とは腹藏なく意見を交わして下さった。

コロナ禍のため対面の研修がしばらく中止となり、お目にかかる機会が途絶えていたが、ご家族からBHN事務局へのご連絡によると、コロナ感染が始まる少し前に手術をされ、その後は介護施設でのご生活であったようだ。昨年6月に、これ以上BHNの活動は困難だとして退会のご意向が伝えられたという。そして本年2月3日に亡くなった。昭和4年5月6日生まれなので、享年93歳である。

2月3日に亡くなられたもう一方は町田邦雄さんである。昭和5年2月24日生まれなので享年92歳であった。早生まれなので岩噌さんと学年はご一緒である。昭和28年に一橋大学を卒業、同年電電公社に入社された。

事務系である町田さんと筆者が関係を持つのは、町田さんが退職後に日本自動車電話株式会社の取締役営業部長に就任されてからである。

最近ではほとんどの方がこの会社をご存じないであろう。電電公社が昭和54年12月に自動車電話サービスを開始したとき、顧客対応を行う子会社として設立した。初代社長は昭和21年入社の小西一郎さんだったと記憶する。小西さんは筆者が入社したときは技師長室調査課無線係長で、直属の上司であった。

サービス開始したときの自動車電話機は無線機本体、送受信器、アンテナの3つからなっていた。送受信器は運転席の脇に、無線機はトランクの中に設置し、アンテナは通常トラン

クの外側、車体に直接取り付けられた。これらの工事や、その後の保守、運用は、一般の電話局で対応するのが困難である。そこで上記の会社が設立された。昭和 29 年入社が無線屋、小川昭さんが取締役技術部長に就任している。

近頃、自分史を書いて自費出版する方が多くなった。自分史については、町田さんはその草分けと言える方だと筆者は思っている。「これまでは人のことかと思いに」という表題の自分史を送って下さったのは、昭和年代の終わり頃のように記憶しているので、今から 40 年近く前である。その後「続」、「続々」と続けて出版されている。

この本が、読む人を飽きさせることなく面白かった。日本エッセイストクラブ会員という肩書に恥じない、プロ作家の著作ともいえる内容である。その町田さんが筆者の技術関係の評論をよく読まれて、何度もコメントを送って下さった。

筆者の最近の著作「電気通信の源流・東北大学」は、自分でいうのはおこがましいが、郵政や電電の事務系OBの方々から「よく書かれている」との評価を頂いている。もちろん町田さんにもお送りしたのだが、すでにお身体の具合が悪かったのであろう、何のコメントも頂けなかったのが残念である。